

果して周代より行はれしや否やてふ問題に至りて しない事とするが、磬の偈句は蓋し戴説の九十七は周禮の書の底本研究となれば、茲には敢て論及 度十分五十一秒が正しくはあるまいかと考へる。

（大正七年七月九日稿）

善導大師の捨身往生は史實なりや

文學士 藺 田 宗 惠

抑も善導大師（西曆六百十三年—六百八十一年）の傳記に關しては、古來善導を一人とする説と、二人とする説とがある。そして二人説を取る者は甲を捨身往生せるものとし乙を正念往生せるものとするを常とする。其來由如何と尋ぬるに、此は敏中侍郎王古の『新修淨土往生傳』に、京師光明寺の善導と終南山悟眞寺の善導との二人者を出せるに因由して居るのである。然るに此『新修淨土往生傳』は、現今僅に下卷のみ存在して、上中兩卷は散佚して居るが、不幸にも今の問題となれる傳記は、其散佚せる部分に在つて、それが今は現存しないのであるから、勢ひ法然上人の著書たる『類聚淨土五祖傳』（漢語燈錄自十六卷至卅一紙）に引用せるものに依るの外に途がない。鎮西良忠のものせる『觀經玄義分傳通記』には『新修淨土往生傳』中卷に、三十三人の有り難き淨土往生行者の傳記を記載せるものを拔萃して居る。而して善導をば其『傳通記』の第二十五卷に記し、善導をば其第二十六卷に記して居る。これから見ると『類聚淨土五祖傳』並に『傳通記』編輯當時には尙ほ完全なる『新修淨土往生傳』が世に存するありて、之を引用したものである。此『新修淨土往生傳』の後に著述せられ

た、志磐の『佛祖統記』も亦た此の『往生傳』に倣うて、其第二十七卷に善導の傳を擧げ、第二十八卷には善導の傳を載せて居る。即ち二人説をとつて各々別に傳を掲げて居る。尙ほ清朝の彭希涑の著なる『淨土賢聖錄』及び瑞璋の『西舫彙征』にも同じく二人説に従ひて、別々の傳を記述して居る。尤も類聚淨土五祖傳に引用せる『新修淨土往生傳』の文には、兩方の善導の導の字を同文字を用ゐて居れども、『佛祖統記』『淨土賢聖錄』『西舫彙征』には甲者を善導とし、乙者を善道と記して居る。此二人説の依て起りたる『新修淨土往生傳』の傳文は左の如くである。

(一)釋善導不_レ悉_二何許人_一。周_二遊_一冀_二字_一。求_二訪_一道津_一。唐貞觀中見下西河神祇師行_二方等_一觀及淨土九品道場_一講_二觀經_一下。導大喜曰此真入_二佛道_一之津要。修_二餘行業_一迂僻難_レ成。惟此觀門速超_二三生_一死_一。吾得_レ之矣。於是篤勤精苦若_二救_一頭然_一。續至_二京師_一激_二發四部弟子_一無_レ問_二貴賤_一。彼居沽_二輩亦_一擊悟焉。導入_レ堂則合掌開跪一心念佛。非_二力竭_一不_レ休。乃至寒冷亦須_レ流_二汗_一。以_二此相

狀_一表_二至誠_一。出_レ即爲_レ人説_二淨土法_一。化_二諸道俗_一令_レ下發_二道心_一。修_二淨土行_一。無_レ有_二暫時不_レ爲_二利益_一。三十餘年無_二別處_一不_二暫睡眠_一。除_二洗浴_一外曾不_レ脫_二衣_一。般舟行道禮佛方等以爲_二己任_一。諱_二持戒品_一纖毫_一不_レ犯。曾不_二三舉_一目視_二女人_一。一切名利無_二心起_一。念_二綺詞戲笑_一亦未_二之有_一。所行之處爭_二申_一供養_一。飲食衣服四事豐饒。皆不_二自入_一并將廻施。好食送_二大廚_一供_二養徒衆_一。唯食_二惡惡_一終得_レ支_二身_一。乳酪醍醐皆不_レ飲噉_一。諸有騷擾將寫_二阿彌陀經_一十萬餘卷。所_レ畫淨土變相三百餘堵。所在之處見_二塚伽藍及故塔等_一皆添營造。然燈續_二明_一歲常不_レ絕。三衣瓶鉢不_レ使_二人持洗_一。始終無_レ改化_二諸有緣_一。每自獨行不_二共_一衆去_一恐_二與_レ人行談_一論世事_一妨_二修_一行業_一。其有_二暫申_一禮謁_一問説_二少法_一。或得_二同豫_一道場_一親承_二教訓_一。或曾不_二見聞_一披_二尋教義_一。或展轉授_二淨土法門_一。京華諸州僧尼士女或投_二身高嶺_一。或寄_二命深泉_一。或自斷_二高枝_一。焚_二身供養者_一略聞_二四遠_一向_二三百餘人_一。諸修_二梵行_一棄_二捨妻子_一者。誦_二阿彌陀經_一十萬至三十萬遍_一者。念_二阿彌陀佛_一日得_二一萬五千_一至_二十萬遍_一者。及釋_二念佛三昧_一往_二生淨土_一者不_レ可_レ知_二數_一。或問_二導曰念佛之善生_二淨土_一耶。對曰如_二汝所念_一達_二汝所願_一。對曰導乃自念_二阿彌陀佛_一。如_レ是一聲則有_二一道光明_一從_二其口_一出。十聲至_二百聲_一光亦如_レ之。導謂_レ人曰此身可_レ厭。諸苦逼迫。情偽變易無_二暫休

息。乃登^三所居寺前柳樹^三西向^三願曰。願佛威神^三以接^三我。觀音勢至亦來^三助^三我。令^三我此心^三不^三失^三正念^三不^三起^三驚怖^三不^三中^三於^三阿陀法^三中^三。以生^三中^三退^三願^三畢^三於其樹^三上^三投^三身自絕^三。時京師士大夫傾^三誠^三歸^三信^三咸收^三其骨^三以葬^三。高宗皇帝知^三其念佛^三日出^三光明^三。又知^三捨報^三之時^三精至^三如^三此^三。賜^三寺額^三爲^三光明^三焉。

(二)唐往生高僧善導隨淄人也。幼投^三密州明勝法師^三出家。誦^三法華維摩^三。忽自思曰。教門非^三入^三二道^三一途^三。若不^三契^三機^三功即徒設。於是投^三大藏經^三一信^三手探^三之得^三無量壽觀經^三。便喜誦^三習於十六觀^三。恆諱^三思惟^三悅^三節^三西方^三以爲^三冥契^三。欣^三慕^三遠法師勝闍^三。遂往^三廬山^三觀^三其遺範^三。乃豁然增^三思^三自後歷^三訪名德^三。幽求^三妙門^三。功微理深^三未^三有^三出^三般舟^三三昧^三者^三上^三。畢^三命斯道^三後遁^三迹終南^三悟真寺^三未^三逾^三數載^三。觀想忘^三疲^三已成^三深妙^三。便於^三定中^三備觀^三下^三寶閣^三瑤池^三金坐^三宛在^三目前^三。涕泗交流^三舉^三身投^三地^三。既獲^三勝定^三。隨^三方利^三物初聞^三。綽^三禮^三師^三普陽^三開闢^三。欲^三下^三不^三遠^三二千里^三。從而問^三上^三津^三時^三逢^三支^三冬^三之首^三。風飄^三落葉^三。填^三滿^三深坑^三。遂挈^三瓶鉢^三入^三中^三安坐^三。一心念佛^三不^三覺^三已^三度^三數日^三。乃聞^三空中^三聲^三曰^三可^三得^三前行^三。所在遊履^三無^三復^三舉礙^三。遂出^三坑^三進^三程^三至^三綽^三禮^三師^三展^三舍^三夙心^三。綽^三公^三即授^三與^三無量壽經^三。導^三披^三卷^三詳^三之^三比來^三所^三視^三宛在^三。因即入^三定^三七日^三不^三起^三。或問^三導^三曰^三弟子念佛^三得^三往生^三否^三。導令^三辨^三一^三莖蓮花^三置^三之^三佛前^三。行道^三七日^三花不^三萎^三悴^三。即得^三往生^三。

依^レ之七日果然花不^三萎黃^三。綽^三歎^三其深詣^三。因請入^三宅^三觀^三當^三得^三生^三否^三。導即入^三定^三須臾^三。師當^三懺^三三罪^三一方可^三往生^三。一者師嘗安^三佛尊像^三在^三橋廊^三下一自處^三深房^三。二者驅^三使策^三役^三出家人^三。三者營^三造屋宇^三損^三傷^三蟲命^三。寧^三於^三十方^三佛前^三懺^三第二罪^三於^三四方^三僧前^三懺^三第三罪^三於^三一切^三衆生^三前^三懺^三第三罪^三上^三綽公靜思^三往^三告^三皆曰^三不^三處^三。於是洗^三心^三悔^三謝^三而見^三導^三。即曰^三師罪滅矣。後當^三有^三白光照^三燭^三是師往生^三之相也。導化^三治^三京^三輩^三道俗歸^三心者^三如^三市^三。後於^三所住^三寺院^三中^三畫^三淨土^三變^三相^三。忽催^三令^三速^三成就^三。或問^三其教^三則曰^三吾將^三往生^三。可^三住^三三兩夕^三而已^三。忽然微疾^三掩^三室^三怡然^三長逝^三。春秋^三六十九^三身^三體^三柔軟^三容色^三如^三常^三。異音^三音樂^三久而方歇^三。時永隆二年三月十四日。

是れ即ち甲を光明寺の捨身往生の善導とし、乙を悟身寺の正念往生の善導とするのである。

之を要するに、『新修往生傳』の後に著はられたる善導の諸傳記は、凡て如上の傳文を其儘襲用したものであるから、此等を一括して一類と見なす事が出来る。従つて『新修淨土往生傳』の上が解決せらるれば、其後のすべての傳記は同時に疑雲を拂ひ得られる。故に吾人は先づ『新修淨土往生傳』

の所傳が果して正なるか否かを檢定せねばならぬ。

元來此『新修淨土往生傳』は戒珠の『淨土往生傳』を刪補したもので、其材料として依用し選取したる戒珠の『淨土往生傳』には、一人の善導のみを傳へて居るのに、夫れを刪定したる今の『新修淨土往生傳』には却て突然二人説をとつて居る。仍て之が解決の順序として、吾人は遙か上代に溯りて善導の傳記の最古のものを求めねばならぬ。

然らばその最古のものは如何と云ふに、即ち善導と同時代の人なる、西明寺道宣師の編輯に係る『續高僧傳』第二十七卷遺身篇第七沙門會通の傳に附記せるものはである（縮刷藏經致帙四_左四十二番）。

此書は、其自序にも記す如く、其内容は梁の初（武帝天監元年即ち西曆五百二年）より唐の貞觀十九年（即ち西曆六百四十五年）まで前後百四十四年間の記事であるから善導大師在世中の著作に係

ることは言を俟たないのである。何となれば、善導大師は貞觀十九年には其齡三十三歳であつたからである。其傳説を擧ぐれば、

近有_二三山僧善導者_一。周_二遊冥寓_一求_二訪道津_一。行至_二西河_一遇_二道綽師_一。唯行_二念佛阿彌陀淨業_一。既入_二京師_一廣行_二此化_一。寫_二阿彌陀經數萬卷_一。士女奉者其數無量。時在_二光明寺_一試法。有_レ人告_レ導曰。今念佛名_一。定生_二淨土_一。不_レ導曰。念佛定生。其人禮拜訖。曰。誦_二南無阿彌陀佛_一。聲聲相次出_二光明寺門_一。上_二柳樹表_一。合掌西望倒投。身下至_二地遂死_一。事聞_二臺省_一。

此『續高僧傳』に次ぐものは文諡少康共錄の『瑞應刪傳』である。續藏經には唐道說撰とすれど、此は瑞應刪傳の序文に見ゆる如く、文諡少康の兩人の共録である。然るに其末文には道說敬造撰とせるは文諡少康兩人の錄せるを校修して出版せるものであらう。其傳文を擧ぐれば、

唐朝善導禪師姓朱。涇州人也。少出家時見_二西方變相_一歎曰。何當_レ託_二質蓮臺_一樓_二神淨土_一上_レ及_二受_二具戒妙開律師_一共看_二觀經_一悲喜交歎。乃曰。修_二餘行業_一迂僻難_レ成。唯此觀門定超_二生

死^一。遂至^二禪禪師所^一問曰念佛實得^二往生^一否。師答曰各釋^二一蓮行道。七日不^レ萎者既得^二往生^一。又東都英法師講^二華嚴經^一四十遍。入^二禪禪師演場^一遊^二三昧^一。而歎曰自恨多年空尋^二文疏^一勞^二身心^一耳。何期念佛不可思議。禪師曰經有^二誠言^一。佛豈妄語。禪師平生常樂^二乞食^一。每自貴曰釋迦倫乃分衛。善導何人端居案^二供養^一。乃至沙彌並不^レ受^レ禮。寫^二阿陀經^一十萬卷。畫^二淨土變相^一三百鋪。所^レ見塔廟無^レ不^二修葺^一。佛法東行未^レ有^二禪師之盛^一矣。

少康法師は即ち善導の後身であると稱せられて居る人であつて、戒珠の『淨土往生傳』によれば、法師は貞元の初めに白馬寺に至り、同二十一年(半途に於て永貞と改元す即ち西暦八百〇五年)に寂すとあれば、善導大師を去ること百二十餘年である。されば續高傳及び瑞應刪傳の兩者は善導大師の傳記としては、同時代を遠ざかつて居る後世の諸傳記よりも、一層信を措くべき價值を有する譯である。殊に善導大師の阿彌陀經を十萬卷手寫せられたといふことが傳文に見えて居るが、此事實

は近時いよく其正確の度を加へて來た。それは即ち先年橘瑞超氏が新疆地方より發掘して將來せる善導大師肉筆の阿彌陀經であるといはれる寫經から證明せられる。之れは正しく善導大師の自筆に相違なからう。其跋文には『願往生比丘善導願寫』と記され、明白に淨土往生を願へる大師の手寫たることが信ぜられる。此等の最古の二傳が基礎となつて現出したものが戒珠の『淨土往生傳』で其傳文は即ち左の如くである。

釋善導不^レ原^二其姓^一亦不^レ悉^二何許人^一、周^二遊寰宇^一求^二訪道津^一。唐貞觀中見^二西河禪禪師行^一三^二方等懺及淨土九品道場^一。善大喜曰此真入佛之津要。吾得^レ之矣。於是篤勤精苦若^レ救^二三頭然^一。續至^二京師^一擊^二發四部弟子無^レ問^二貴賤^一彼居沽輩亦擊^二偈焉^一。嘗寫^二彌陀經^一數十萬卷。散施受持。以^レ故京師至^二于左右^一。列郡念^二經佛^一者踵^二述而是^一。或問^二導曰念佛之善生^二淨土^一耶。對曰如^二汝所念^一遂^二汝所願^一。對曰導乃自念^二阿彌陀佛^一。如^レ是一聲則有^二一道光明^一從^二其口^一出。或共十聲至^二于百聲^一。光^二如^レ之^一導厭^二此身諸苦逼迫情偽變易無^二暫休息^一。乃登^二所居寺前柳樹^一西向願曰。願佛威神縣^二以接^一我。觀音勢至亦來

助我。令下我。此心不_レ失。正念_二不_レ起。驚怖_二不_レ於_二彌陀法_一。
中_一以生中退墮_レ願畢於_二其樹上_一投身自絕。時京師士大夫傾_レ誠歸信。咸收_二其骨_一以_レ葬。高宗皇帝知_二其念佛口出_二光明_一。
又知_二捨報之時結至如_レ此_一。下_レ詔以額_二其寺_一爲_二光明_一焉。

茲に見るが如く、此傳記には尙一人説を守つて居る。但し此に至りて錯誤の生じて居るのは、善導大師自身が、捨身往生せられたと云ふ傳説である。元來『續高僧傳遺身篇』の會通傳記に附記する大師の傳文中に捨身往生の事件が見えて居るのであつて、それでこそ此『遺身篇』に編入されて居るのであらう。けれどもその捨身往生を遂げた人は善導自身でなくて、善導の膝下に聞法隨喜したる門下の者が、善導の教へを受けて門を出づるや柳樹の上より合唱要望して身を投じて自ら絶したものである。然し戒珠とても、これ程明かに弟子の投身を記せる文章を誤解したのではあるまい、多分推論して善導の弟子既に然り大師自身も亦捨身

往生せられしに相違あるまいと思惟し之を誇張したものであらう。況や此續高僧傳に見ゆる善導の傳記は道宣が善導の存生中に編輯せられたものであつて、其記載事實の善導示寂後に及ぶべき筈はないのである。然るに不幸にも戒珠が一度之を善導自身の事として傳記に記してから、捨身の事實が、善導大師の徳であるかの如く思考せられて來た。此に於て法然上人の書かれた『善導十徳』（漢語燈錄）には第七に遺身入滅徳として、之を十徳の隨一に列してある。是れ則ち捨身往生を指すものである。此は畢竟遙かに古き傳記に溯れば、善導の捨身往生は見えて居ないけれども、後世に誤まつたのである。その誤れる後世の傳記を其儘襲用されて、法然上人は斯くの如く記述せられたのであるらう、而して此『淨土往生傳』を所據としてもせる『新修淨土往生傳』は、一面に於ては『續高僧傳』に依りたる淨土往生傳を骨子として、それ

に續高僧傳に弟子の事とせる捨身の事蹟を善導自身の上に附加して之を光明寺の善導とし、また他の一面に於て『瑞應傳』の方を骨子とせるものを悟真寺の善導としたものであつて、其實は決して二人の善導が存在したのではない。畢竟悟真寺と云ひ光明寺と云ふは、別人の所居ではなくて、同一善導が閑居修觀の間は終南山の悟真寺に居り、京師に入りては光明寺に住したものであつて、恰も曇鸞大師が、時の前後によりて、大巖、玄忠兩寺に住せられたのと同様である。現に二人説をとる所の傳記者が、光明寺の善導の所據たる『續高僧傳』には、山僧善導と云つて居る。山とは即ち終南山の略である。何故終南山の略であるかといふに、會通既に終南山の人である、夫れに附記せられたる善導であつて見れば、單に山僧と云ふことも、其本傳たる會通に云つて居る終南山であることは明白であるから省略したものである。而も山僧の善導が、京師に入り光明寺に在りて盛に化導したとあるから推考すれば、終南山善導と光明寺の善導とは二者別人ではなく、全然同一人であらねばならぬ。隨て別に捨身往生の善導なる人の存在せざりし事が明瞭である。猶戒珠は光明寺と名くる由來を説明して、大師が念佛を唱ふる毎に口より光明を出せしことや、捨身往生のことや、此等の奇瑞に感ぜられて高宗皇帝が寺を光明寺と號したと云ふて居れど、戒珠のよりは前なる文諗少康の瑞應刪傳には少しも此事が見えて居らず、また最初の傳記なる續高僧傳の會通傳に附記せる善導の傳文には在「光明寺」説法とあつて、これから見ると、善導の存生中に既に光明寺と云ふ寺があり、そこに善導大師が住して説法されたものなることは疑ふ餘地が無い。又本派の碩德智空も二人説を立て、其『選擇集講辨』に長安の善導は三月十四日に遺命し、臨淄の善導は三月十七日に正念往

生せりと云つて、入寂日の異れるに基きて二人説を力説して居るけれども、之は牽強附會の説である。『新修往生傳』には、臨淄の善導を却て三月十四日に正念往生せりと云つてある。而して宋の西明寺玄暢の撰に係る『帝王年代錄』には三月二十七日としてある。何れも永隆二年なることは同様である。此入寂日に二あるは、二人者の歿日を意味するのではなく、同一人者の歿日に於ける異説であるから、決して二人説の確固たる證據とはならぬ。例へて言へば玄奘三藏の入滅に關して『年代述記』には年六十三歳にして二月五日入滅とあり『帝王年代錄』には年六十五歳にして二月六日入滅とあるが如きものである。されば善導大師の場合に於ても、同一人の入滅の異説に過ぎないのである。

時に兩者を別人としては餘りに類似の點が多くて、常識を以ても左様な類似を有する兩箇の別人

が存せしものとは考へられぬ。乃で傳通記の記主良忠を始めとして、光明大師別傳纂註の著者蔡翁激等は兩善導に對して、十一同、三異を分別して居る。其十一同とは(1)時代(2)師範(3)行經(4)得定(5)懺悔(6)白光(7)寫變(8)專修(9)精進(10)滅年(11)滅月で三異とは(1)導と道(2)滅相(3)滅日はれである。斯くまでに類似の點が兩人の間に在りとは考へられぬ事で、是れ畢竟同一人なるを證明するものである。以上の所論によりて善導の二人説のどるに足らず、隨て捨身往生を遂げたる別の善導の存在せしことも遙か後代に生じたる傳説なることが明瞭である。

猶予は未だ善導大師の入滅年代に關して充分研究するの餘暇がないから、今は永隆二年に六十九歳にて入寂されたと云ふ普通の説を假りに採用したもので、此假定説が如何なる程度迄信すべきものやば更に他日の研究に譲ることゝした讀者幸に之を恕せられよ。